

2024年1月14日

愛に生きる模範として

ヨハネ 13：12～20

・弟子の足を洗うイエス様

新しい年、2024年の歩みを歩み始めました。驚くような出来事が起こり、本当に不安が不安を呼ぶような中で新しい年を歩んでいます。そのような中に生きる私たちが、どのような思いを持って歩んで行くのか、今日も示されている御言葉を通して、共に受け止めていきたいと思えます。

まず、12節に「弟子たちの足を洗ってしまうと」とあります。この時、食事の席についている弟子たち全ての足を洗われたのです。当時、食事の席につく時に、奴隷が足を洗うのが常でした。ところが、この日には、イエス様が弟子たちの足を洗われたのです。恐らく全ての弟子が戸惑ったと思いますが、ペトロはその戸惑いを言葉にしました。「私の足を洗わないでください」と言ったのです。それに対して、イエス様は「洗わなければ、何の関わりもなくなる」と言われました。

なぜ、イエス様は弟子たちの足を洗ったのか、その時弟子たちには分かりませんでした。しかし、この出来事を伝えている福音書を記したヨハネは、「世にいる弟子たちを愛して、この上もなく愛し抜かれた」と記しているのです。この「この上もなく」とは、「極限まで」という意味です。ですから、イエス様が弟子たちを極限まで愛された、そのことが弟子たちの足を洗われたことに示されています。

そして、イエス様が弟子たちの足を洗われたことで大切なことは、全ての足を洗われたことです。この弟子たちには、この後イエス様を裏切り、イエス様が十字架にかけられていくことに協力することになるユダが含まれていました。イエス様は、ユダが裏切ることを知っておられました。知っておられて、ユダを除いて、他の弟子たちの足を洗われたのではありません。ユダを含めて、全ての弟子たちの足を洗われたのです。ですから、ユダを含めて、全ての弟子たちを極みまで愛されたのです。そのことに、イエス様が全ての者を深く愛されている、その御心が明確に示されているのです。

・イエス様の招き

そうして、ユダを含めて、全ての弟子たちの足を洗われたイエス様が、上着を着て、再び食事の席につかれて、こう言われました。「わたしがあなたがたにしたことが分かるか。」と。最初、私は、イエス様がどうしてこう言われたのか、よく分からない思いがしました。イエス様は、ペトロの足を洗われた時に、「今あなたには分かるまい」と

言っておられるのです。弟子たちが、どうして自分の足をイエス様が洗っておられるのか分からないことを知っておられるのです。そして、ペトロだけではなく、全ての弟子たちも分かっていなかったのです。そういう弟子たちの姿を、イエス様は知っておられる。それなのに、改めて、「わたしがあなたにしたことが分かるか」と言われているのは、どういうことだろうかと思いました。敢えて言えば、イエス様は少し意地悪ではないかとも思ったのです。しかし、改めて考えていまして、ああこうことではないかと思われたのです。それは、今分かっていないとしても、どうしても知ってほしいと思いはないかということなのです。そして、後にイエス様がここで何をされたのか分かる時がやって来る。その時には、この極限まで愛された経験を持って歩んでほしい、イエス様の切なる願いが示されているということではないかと思います。

そして、極限まで愛された経験、それを持って生きるとはどういうことか、イエス様は明確に示されています。「ところで、主であり、師であるわたしがあなたがたの足を洗ったのだから、あなたがたも互いに足を洗い合わなければならない」と言われたのです。イエス様に足を洗っていただきました、極限まで愛されましたということでは済まない。イエス様に足を洗っていただいた以上、今度は、お互いを愛し合っていく、その歩みへと進み出ていくことが求められているということなのです。極限までイエス様に愛されている。「はいそれで終わり」とすることはできないということです。それを持って生きる、つまり、お互いを愛し合って歩んで行く、そこへと招かれているのです。このイエス様に言葉を聞いて、多くの人はその通りであると思うと思うのです。イエス様はおかしなことを言っているとは思われないと思うのです。

恐らくは、イエス様に極限まで愛されているということを知らなかったとしても、多くの人は互いに愛し合っていくことが必要だと思っています。他の人のことなどどうでも良い。自分が幸せであればそれでよい。そう思っている人は、決して多くないと思います。愛は大切、愛し合って歩んで行きたいと思っています。問題は、愛に生きることは決して簡単ではないことなのです。愛すること大切、しかし、実際に愛に生きていこうと思えば、途端にとてつもない困難な道を歩んで行くことのように思えるということです。

まず何より、人を愛して歩もうと踏み出そうとした時にはっきりと見えてくるのは、自分の愛の乏しさです。私も自分の愛の底の浅さを見せつけられる経験を持っていますが、恐らく多くの方々か「愛が大切」と言われればその通りと思いつつも、ではどう生きて行ったらよいか、重い課題を与えられたようにお感じになるのではないかと思います。イエス様はそういう私たちを「愛さなければだめだ」と、叱責されているのでしょうか。私たちの愛の乏しさを断罪するような思いで「互いに愛し合いなさい」と言

われているのでしょうか。勿論そうではないのです。イエス様がここで示されているのは、実際に愛に生きる道筋なのです。

・「模範」であるイエス様

「あなたがたもするようにと、模範を示したのである。」と、イエス様は言われます。私も、この言葉を何度も読んできたつもりでした。けれども、イエス様がどういう思いでこの言葉を弟子たちに、そして私たちに伝えておられるのか、深く受け取っていただろうかと思われたのです。

まず受け止めたいのは、イエス様が「模範」であるということなのです。イエス様が愛の方であると言え、誰もがその通りと思うと思うのです。イエス様に示されている愛は、どれ程深く豊かなものであるかと思えます。しかし、そういうイエス様の愛を受け止めますから、自分たちの愛とは異質、とてもイエス様のように生きることにはできないと、最初から思っているのではないかと思えます。目標にすらならない。私は、そんなふうに考えていたのではないかと思えます。しかし、イエス様は言われるのです。「私を模範として生きよ」と。

更に、もう一つ心に残った言葉があります。それは「主であり、師であるわたし」と、イエス様が言われていることなのです。私たちは、イエス様が「主」、つまり、私たちの主人、全ての責任を負う者であることは、一応受け取っているように思います。けれどもイエス様は、私はあなたがたの師である、敢えて言えば師匠であるということなのです。イエス様を師匠として歩むということなのです。

少し前ですが、ある展覧会を見に行った時に、とても印象に残ったことがありました。その展覧会は、絵を描いた画家が中心ではなく、明治期から昭和期にかけて、広く日本の画家を支えたある人物の絵画のコレクションを辿るというものでした。その人が収集したのは、必ずしも名が知られている画家だけではありません。それ程評価が定まっていない何人かの画家を、その人が支えていったのです。それで、それぞれの画家の絵が飾られ、その画家についての略歴がありました。そして、その略歴には必ずと言ってよいほど、〇〇に師事（〇〇とは著名な画家ですが）という記載がありました。その画家がどのような作風であるのか知るために、誰の指導を受けたのか、誰を師としてきたのか、それが大切な情報だということなのです。それ程、画家の世界では誰を師として持つのが重要だということなのです。私たちも、言ってみれば、イエス様を師、つまり、師匠として持っている者なのです。イエス様を「模範」として与えられている者です。イエス様の愛を模範として、私たちは歩んで行くのです。

イエス様を模範とする、それが、今日の聖書の箇所を通して、私たちに示されている

ことです。そして、それを持って、今年の歩みを歩んで行く、私たちに与えられている歩みですが、それでも戸惑いがあります。イエス様を模範として歩んで行く、言葉としてはよく分かるのです。けれども、その歩みは実際にどういうものなのだろうかということなのです。

そのことをきちんと受け止めるために、この「模範とは何か」について、考えてみたいと思います。「模範」は、私たちにとってある理想というような受け止め方ではないかと思います。しかし、私はこの「模範」について、ああそういうことかと受け止めることに繋がったことがありました。直接今日の箇所ではありませんが、「模範」と出てくる他の聖書の箇所である牧師の説教の言葉です。そこで、その牧師は、「模範」とは「お手本」とであると言われたのです。直ぐに思い浮かんだのは、書道の姿です。書道を初めて最初はなかなか形にならない。その時に、私もしたことがあります。先生の書いたお手本を下に敷いて書くのです。そうして、何度も何度も書いていく。そうしていくうちに、少しずつ整えられていく。そういう姿を思い浮かべたのです。つまり、イエス様の姿は、遠い方にある理想ではなく。私たちのお手本なのです。お手本をなぞってなぞっていくのです。そうして、本来乏しい愛しか持ち合わせていないはずの私たちが、少しずつ愛に生きる道を進ませていただくのです。そこにこそ、「互いに愛し合っていく」道が備えられていくのです。

・手本の持っている意味

改めて、私たちが互いに愛し合っていく道を辿っていくために、私たちのお手本であるイエス様の姿を受け止めたいと思うのです。この手本の中で明確に示されているのは、弟子たちの足が洗われている事実です。この前の箇所を読んだ時にもお伝えしましたが、単に目の前の弟子たちだけではありません。世にいる弟子たち、つまり、私たちを含めて、イエス様と共に歩もうとしている全ての人たちを指しています。ですから、私たちがまたイエス様から足を洗われたものであるということです。そして、イエス様に深く愛されている者であるということです。私のために命を捨てる、それほどまでに深い愛で私たち一人一人は愛されているということです。この愛を手本に持つということは、どういうことでしょうか。

このことを通して、私たちに何が示されているのか、どういうことが大切なのか、考えていまして、こういふことではないかと思われました。私が本当に深い愛で愛されているということを受け止める。それは、それで止まらず、新しい世界を開いていくということです。イエス様は、私の足だけを洗ってくださったのでしょうか。言い換えれば、イエス様は私だけを愛されているということでしょうか。勿論、そうではないの

です。私の足を洗ってくださったイエス様は、全ての者の足を洗われたのです。裏切ることになるユダを含めて、全ての者の足を洗ってくださったのです。そうしますと、この人はどうでも良いと言える人はいないということになります。そこからお互いの関係を見つめ直していくことなのです。

愛するとは何でしょうか。ある人は「関係を保ち続けていくことだ」と言いました。イエス様も「足を洗わなければ関係がなくなる」と言われました。イエス様はどこまでも私たち一人一人を支えるという形で関係を保ち続けてくださるのです。それならば、私たちが互いに愛し合っているとは、お互いの関係を保ち続けていくことです。それも、お互いがイエス様に深く愛されている、そのことを持ち続けて歩むことです。そうして歩む時に、「愛し合いましょう」という掛け声による関係ではなく、実際にイエス様に愛を中心にした交わり、つまり、愛の関係が生み出されてくるのです。そこに、イエス様が私たちが招こうとされている互いに愛し合っていく道が開かれていくのです。

・イエス様の愛を受けて

そして、互いに愛し合っていく道を歩いて行くために、なくてはならないものがあります。それは、私たちの内に隣人を愛することができるような愛はないことを深く認識することです。愛そうという努力や心がけだけではどうすることもできないのです。それが、私たちの本当の姿であることを受け止めるのです。だからこそ、本当の意味で互いに愛し合っていく道をどのようにして歩いて行くことが出来るか、はっきりするのではないかと思います。それは、イエス様から愛を受けることです。例えてみますと、私たちはガソリンの入っていない自動車のようなものです。愛に向かって進もうとどんなに思っても、進むことはできない。そのような私という自動車が、愛に向かって進んでいくことが出来る唯一の道があります。それは、イエス様から愛という燃料を頂くことなのです。そして、イエス様から愛をいただく時に、ようやく前に向かって進むことが出来るのです。

なぜ、イエス様は、互いに愛し合っていく道へと私たちを招かれるのでしょうか。それは、そうして、イエス様に愛に更に深く出会っていくことが出来るからなのです。この後、イエス様は、弟子の中から裏切る者が出ることを告げられます。そして、そのことを告げた後に、こう言われるのです。「事が起こる前に、今、言うておく。事が起こったとき、『わたしはある』ということ、あなたがたが信じるようになるためである。」と。これから起こることは、弟子の一人が裏切るという、思いもしない現実です。他の弟子たちもまた、実は自分たちが揺さぶられるような経験をするようになるのです。その時、既に語ったイエス様の言葉が支えていくと言われるのです。「私はある」とい

うことを信じるようになる。信じる、つまり、頼ることが出来るように、イエス様は先に話していると言われるのです。

私は、このイエス様の言葉の真意は、本当に深いなあと思われました。イエス様は「互いに愛し合いなさい」と言われますが、これ、人間の生き方の理想として語っているわけではないのです。これから、過酷な状況の中を進んでいかなければならないその弟子たちにとって、その時に、一体何が支えとなるのかということです。それは、「わたしがあつた」ということなのです。ここでの「わたしがあつた」は、ヨハネによる福音書で大切に使われている言葉で、「私は〇〇である」、例えば「わたしはぶどうの木」とか、「わたしは羊飼つ」と語られる時の言葉なのです。つまり、イエス様が自らどうつたお方であるかを語られる言葉です。そして、この「私はあつた」とは、結論だけ申しますと、その意味するところは「私がここにいる」という意味です。弟子たちは、本当に深い絶望の中を歩まなければなりません。しかし、そのような常用の中で、互いに愛し合つていくことを通して、イエス様の愛がここに確かにあることを受け止めていくのです。そこへと立ち返つて来ることが出来る、そのことが危機の中を歩む真の支えになるのです。

昨年 11 月に、依頼を受けてある機関誌に文章を書きました。原稿依頼の趣旨は、教会が繋がつて歩むことの大切さを書いてほしいということでした。コロナや少子高齢化で、それぞれの教会が厳しくなつている中で、教会が繋がつて歩むことの重要性を受け止めたいとのことでした。私は、文章を用意しながら、とても思わされたことがありました。教会が繋がつて歩む、支え合つていくということは、一般にも言われるような助け合いの精神としてひつようなことなのだろうかということでした。しかし、そうではないのではないかと思われました。むしろ、そもそも教会は繋がつて歩むものではないかということでした。それは、結局、教会は繋がつて歩むの中で、キリストが共にいてくださることを深く知つていくのではないかと思うのです。そのことは、私たちが、これまで佐川教会との繋がりの中を、そして、今高知中央教会とのつながりの中を歩んで来て受け取つていることなのです。繋がつて歩んでいることこそが、大切な意味を持っているのです。その歩みの中で、イエス様が共にいてくださることを実際に経験していくのです。

今は、教会同士の関係のこととしてお話ししましたが、しかし、このことは、教会同士の関係に止まらないことは言うまでもないことです。イエス様に従つて歩む私たちにおいても、同じように実現するものではないかと思つます。お互いが覚え合つていく中で、イエス様が共に歩んでくださることを知らされていくのです。私は、自分の人生の中で最も厳しい時に、ある牧師の一言で支えられました。その言葉は、一般的に言

えば、決して慰めの言葉ではありませんでした。しかし、どこに立つのか、改めて知らされたのです。その言葉によって、ようやく、前に向かって進むことが出来たのです。私が経験したことは、それぞれの交わりの中で、起こり続けているのではないかと思います。

私たちは、今年も、イエス様に愛されている者として歩んで行くのです。しかし、その道を、私一人では歩んで行くではありません。共にイエス様の愛に与っている者として、お互いを覚え合って、歩んで行くのです。そして、そこに形作られていく生活は、単に「愛さなければならない」では考えることが出来ないような、新しい生活です。真の意味で、お互いを覚え合って歩む生活なのです。今年もその道を、共々に歩んで行きたいと願います。